令和2年度第2回総合計画審議会資料
第5次基本構想より抜粋

１－１　将来像

小諸市の将来像を次のように定めます。

住みたい　行きたい　帰ってきたい　まち　小諸

～ 自然と文化と人々が織りなすハーモニーで
みんなにやさしい　活気あふれる　高原の城下町に ～

日本は、「少子化」「超高齢化」「急激な人口減少」という、かつて経験したことのない極めて大きな困難に直面しています。小諸市もまた同様であり、むしろその状況はより深刻です。

また、小諸市には、「恵まれた自然環境」「長い歴史の中で育まれてきた伝統や文化」「人々の絆」といった様々な財産（お宝）がありますが、残念ながら、これらを十分まちづくりに活かしているとは言い難いのが実情です。活かしてこその財産（お宝）ですが、貴重な財産（お宝）が次第に埋もれつつあるばかりか、財産（お宝）そのものが失われていく心配さえあります。

例えば、晴天率が高いという地域特性があるにもかかわらず、市民にあまり知られていない、世代間交流の機会が少なくなり、小諸ならではの伝統や文化が継承されていかない、コミュニティ意識が薄れ、人々の交流や支え合いが少なくなってきている等々、あらためて小諸市を見つめ直してみると、数多くの課題が浮かび上がってきます。

このように様々な困難や課題がある中にあって、小諸市は、「住みたい　行きたい　帰ってきたい　まち」をめざします。

このめざすまちは、今住んでいる人にとっては、本当に「住んで良かった」と思えるまちであり、それ以外の人にとっては、「住みたい」「行ってみたい」と思える魅力あるまちであり、就学や就職などのために一旦はこの地を離れても、常にふるさとに思いを寄せ、やがては「帰ってきたい」と思える心温かいまちです。

そうした「まちづくり」の根底に、通奏低音（※）のように流れているのが、あらためてその存在や価値が見直された「かけがえのない恵まれた自然環境」や「長い歴史の中で育まれてきた伝統や文化」や「人々の絆」です。これらの「小諸らしさ＝小諸市のお宝」にさらに磨きをかけ、ハーモニーを奏でるように調和させることにより、性別や年齢や障がいの有無などに関わらず、すべての人が安全に安心して暮らせる、活気にあふれた「高原の城下町」の再生をめざします。

自らの「まち」をつくるという営みは、市民一人ひとりの生活そのものです。「まちづくり」に、市民一人ひとりがその役割と責任を自覚し、市民みんなが心をひとつにして取り組むことによって、いつまでも小諸市が小諸市であり続けることのできる持続可能な自治体をめざします。

※通奏低音：　バロック音楽で広く用いられた技法で、アンサンブルの支えとしての低音部のこと。転じて、「表面にはあらわれないが一貫してその物事に影響を及ぼし続けている要素」の例えとして使われる。

１－２　将来目標

将来像を達成するため、将来目標を次のように定めます。

将来目標１　平成 39（2027）年度に
人口 38,279 人 かつ 年少人口 4,478 人

【設定理由】 将来像で掲げる「住みたいまち、帰ってきたいまち」が実現すると、何よりも定住人口の増加につながり、現在予測されている人口減少に一定程度の歯止めがかかると考えられることから、「人口」を目標とした。また、「活気あふれるまち」であるためには、若年層の人口増加がより重要であることから、総人口のうちの「年少人口」も併せて目標に設定した。

【数値根拠】「将来人口推計（将来展望）」で設定した平成 39 年度時点の数値を目標とした。

将来目標２　平成 39（2027）年度に
小諸市に住み続けたい市民の割合 75%

【設定理由】 将来像で掲げる「住みたいまち」であることは、当然ながら、今住んでいる市民にとって、本当に「住んで良かった」と思えるまちであり、「今後も住み続けたいまち」であると考えられることから、「小諸市に住み続けたい」と思っている市民の割合を目標に設定した。

【数値根拠】 「こもろ・まちづくり市民意識調査」における「これからも小諸市に住み続けたいと思っている人の割合」が、直近で 62.1%であり、この数値を基準とし、平成 24 年度の調査では、「住み続けたい」の割合が 68.6%であったことから、これ以上の数値をめざすこととした。また、地元高校生へのアンケート調査において、「希望する就職先があれば、将来も地元に住みたいという生徒の割合」が 77.4%あったことから、４人に３人（75%）は小諸市に住み続けたいとい思っていることを目標数値とした。

将来目標３　平成 39（2027）年度に　**交流人口 544 万人**

※交流人口：小諸駅利用者、高速道路小諸 IC 利用数、高速バス小諸市内乗降客数からの仮想算出による。

【設定理由】 将来像で掲げる「行きたいまち、帰ってきたいまち」であれば、観光客や帰省客などを対象とした「観光・交流人口」の増加につながる。ただし、観光・交流人口の正確な把握は困難であることから、数値が把握できる小諸駅利用者数、小諸インター利用台数及び小諸市内における高速バス利用者数を用いて動態を把握することとし、『（仮想）交流人口』を指標とした。

【数値根拠】 12 年間で 10%、年間 1%程度の増加をめざすこととした。